

# NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

August 2017 vol.26



島根県芸術文化センター  
SHIMANE ARTS CENTER  
島根県立石見美術館  
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「石見の戦国武将 一戦乱と交易の中世一」

武家の肖像画とは？

企画展「エドワード・ゴリーの優雅な秘密」

魅惑の小さな絵本 エドワード・ゴリーの世界

特別展「没後20年 喜多村知の風景」

その先に在るもの 奥底に秘そむもの

# 26



重要文化財 狩野松栄《益田元祥像》  
桃山時代 如天玄勲／賛 島根県立石見美術館蔵

## 「石見の戦国武将 一戦乱と交易の中世」

2017年9月30日(土)～11月13日(月)

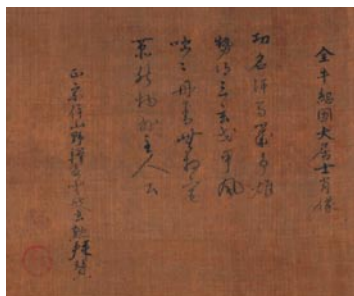
休館日:火曜日(ただし10月3日は開館) 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A



B



C

A. 《大内義隆像》 享和元年(1801) 大嶺珣光/賛 大寧寺(長門市)蔵  
展示期間:10月25日～11月13日

B. 重要文化財 雪舟《益田兼堯像》 室町時代 竹心周鼎/賛  
益田市立雪舟の郷記念館蔵 展示期間:10月25日～11月13日

C. 重要文化財 狩野松栄《益田元祥像》(賛の部分)

## 武家の肖像画とは?

今回の展覧会では中世、すなわち今から800年から400年ほど前、平安時代末から安土桃山時代にかけて、石見国を治めていた武将たちの歴史と文化を紹介する。展示作品の中には、益田氏の歴代当主やその他の武家の肖像画もある。

武家の肖像画が描かれるようになったのは、10世紀頃、武士が社会的な身分として認知されるようになってからだと考えられている。公家社会では官の位に応じて、その装いに厳格なルールが定められていたが、武家社会では公家社会とは異なる規範が生まれ、独自の装い方が定着していった。

武家の肖像画は一様ではなく、いくつかの種類に分類される。まず大きく二つに分けると、出家した後の姿である法体像と、世俗の姿を描いた俗体像がある。さらに俗体像には、束帯系、直垂系、甲冑騎馬像などがある。

束帯はもともと公家の正装であり、天皇・摂関・大臣を描いた肖像画に見られる。武家の肖像画では、《伝源頼朝像》(鎌倉時代、神護寺蔵、国宝)に典型的なように、鎌倉時代初期にはまだ公家の束帯を踏襲する傾向がある。室町時代になると束帯は減少して直垂が主流となるが、安土桃山時代以降には天下統一の気運が高まり、

有力な武将が神格化される過程で、再度束帯で描かれるようになる。今回の展示作品の中では、250回忌に制作された《大内義隆像》(図A)が束帯の肖像画にあたる。

直垂は動きやすい服装であるため、本来は庶民の労働服だったが、鎌倉時代に入ると武家に好まれるようになり、室町時代には武家の礼装になった。中世の武家肖像画の中ではこれを着たものが最も多く、例えば《益田兼堯像》(図B)がある。

俗体像の中で、最も武家らしい武装した姿を描いているのが甲冑騎馬像で、《益田元祥像》(表紙)がそれである。甲冑騎馬像は、戦に赴く際の姿であることから出陣影とも呼ばれ、南北朝時代に描かれ始め、室町時代から安土桃山時代にかけて流行したものの、江戸時代以降には描かれなくなった。

ところで、肖像画の上方には漢文が書かれており、これを「賛」という(図C)。賛には描かれた武将の人柄や功績、肖像画が制作された目的などが記される。絵が完成したすぐ後に、肖像画の発注者が高僧に賛を書きように依頼することが多いが、絵が描かれたずっと後に高僧が賛を記す場合もある。《益田元祥像》の場合、絵は狩野松栄の没年である1592年以前に描かれ、生

前の元祥を讃える内容の賛は、元祥の没年の1640年から如天玄勲が洞春寺の住持であった1651年までに記されたと考えられる。よって、絵と賛には50年ほどの隔りがあることになる。

肖像画の制作過程は、今でいうと友人や家族の記念日などにその人の肖像画を描き、お世話になった学校の先生や友人などに寄せ書きを頼むようなものである。武家の肖像画では、名のある絵師に絵を描いてもらい、名のある僧に賛を書いてもらうことは、一つのステータスでもあった。

なお、像主(描く対象となる人物)の生前に描かれた肖像画を寿像、一方没後に描かれたものを遺像という。どちらも像主を礼拝するために描かれることがあるが、特に寿像の場合は像主の威厳を示すために、遺像の場合は先祖の供養やその家系の正当性を示すために描かれることが多い。

武家の肖像画を見る際には、その武将の事績を思い浮かべるだけでなく、武将の装いや制作経緯についても注目してほしい。

## 「エドワード・ゴリーの優雅な秘密」

2017年12月2日(土)～2018年2月5日(月)

休館日:火曜日(ただし1月2日は開館)、12月28日～1月1日 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

企  
画  
展



図1



図2



図3

図1.『うろんな客』原画 1957年

図2.『ギャジュリークラムのちびっ子たち』原画 1963年

図3.『輝ける鼻のどんぐり』原画 1969年

©2010 Edward Gorey Charitable Trust/蔵

## 魅惑の小さな絵本 エドワード・ゴリーの世界

エドワード・ゴリー(Edward Gorey, 1925-2000)は、異色の絵本作家として知られている。

彼の本を手にして、まず目を惹くのは、ペンで細かく描かれたモノトーンのイラストだろう。紙面全体にびっしりと描きこまれる場合もあれば、余白を活かし、描かれたものが強調される場合もある。添えられた活字は、絵にあうよう繊細な筆致で描かれている。文章も押韻や造語、古語などを駆使した凝ったものである。作り手の美意識がすみずみまで行き届いており、その本はマルチプル、つまり量産された美術作品ともいえるだろう。実際、彼はあるインタビューで、自身の本を美術品としてとらえていると述べ、それゆえ読者には、著作をまとめた作品集ではなく、オリジナルの本を見てほしい、と語っている。そして、それが豪華な紙に印刷された、何百ドルもするような美術書であつたらしくりこない、ともコメントしている。<sup>※1</sup>

実際、手軽に入手可能なゴリーの小さな絵本は多くの人を虜にした。彼はあるインタビューで、自身の作品が読者にどういった影響を与えるか問われた際、「人を落ち着いた気分させるものではない」と答えている。<sup>※2</sup> このコメントは、ゴリー作品の魅力について考える際に手がかりとなる。例え

ば、『うろんな客』(図1)では、ペンギンのような正体不明の生き物が、突然ある館にやってきて棲みつく。『ギャジュリークラムのちびっ子たち』(図2)では、子どもたちが次々と恐ろしい目に遭うが、その理由は示されない。実際に起こった殺人事件を下敷きに創作された『おぞましい二人』では、陰惨なストーリーが展開するが、悲惨な出来事そのものは描かれず、ほのめかされるだけである。テキストがなくイラストだけで構成された『ウエスト・ウイング』では、訳の分からないなんとも不気味な場面がえんえんと続く。このような読み手を「落ち着かない気分」にさせるストーリーは、それに添えられた魅惑的なイラストと組み合わせられ、私たちに独特の不思議な世界観に満ちたゴリーワールドに誘うのだ。

日本では、2000年に柴田元幸訳による『ギャジュリークラムのちびっ子たち』や『うろんな客』、『優雅に叱責する自転車』などが出版されると人気が高まった。柴田氏は、翻訳する時には、オリジナルの文章の「自然さ」加減が、邦訳においても等価になるよう心掛けている、と述べている。<sup>※3</sup> 魅惑的なイラストとともに、卓越した翻訳が、オリジナルの作品の魅力を十分に日本の読者に伝えていることも、国内でのゴリーブームというべき状況を支えているといえるだろう。国内では

主にゴリー自身がテキストとイラストを手掛けた「主著」と、他著に挿絵を描いた絵本の仕事を紹介されているが(図3)、ミュージカルやバレエなどの舞台芸術にかかわり、テレビ番組のオープニングアニメーションを制作するなどその活動は多岐にわたった。

注目が高まるなか開催される本展「エドワード・ゴリーの優雅な秘密」は、エドワード・ゴリー公益信託とブランディワイン・リバー美術館によって企画され、アメリカ各地を巡回した原画展を日本で紹介するものである。展示会場では、ゴリーの手がけた小さな本を一堂に集めて、その著作全体を眺めることができる。いっぽうで、原画の繊細な筆致をじっくりと楽しむこともできる。何度見ても、また見たくなる、ゴリーワールドの謎の「秘密」に迫ることができるまたとない機会となるだろう。

※1 エド・ペンセント「ゴリーな出会い」、カレン・ウィルキンソン編 小山太一・宮本明子訳 『エドワード・ゴリー インタビュー集成 どんどん変に…』河出書房新社、2003年、201頁

※2 リチャード・ダイアー「毒のペンを持つ男」、前掲書、127頁

※3 2016年10月1日、下関市美術館で行われた講演会における発言

## 「没後20年 喜多村知の風景」

2017年10月26日(木)～2018年1月8日(月) 島根県立美術館 展示室5

2018年1月12日(金)～3月12日(月) 島根県立石見美術館 展示室C

島根県立石見美術館 休館日:火曜日 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

## その先に在るもの 奥底に秘そむもの

何気なく目に写してきた日常の風景。それが何かの拍子に、昔の記憶を伴って脳裏に浮かぶことってないだろうか。そして、ああ、切り取られたままの感情がまだそこに置き去りになっていたんだな、とその時になって気がつく。風景が「絵」になっていると、こうした感覚に遭遇する機会が多い。描いた画家は既に亡く、この風景がもはや存在しなくても。また、例えば一度も行ったことがないイメージとしての風景であったとしても、絵の前に立って眺めていると、瞬時にしてその場に「還れ」てしまう。

喜多村知(1907-97)の描く風景画は、誰もが持つ過去の記憶の陰影を背負っているような、独特で不思議な吸引力を持つ。今回、喜多村の作品を所蔵する島根県立美術館の学芸員の発案により、特別展を企画して、東西の美術館で巡回しようという話になり、改めてその作品とじっくり向き合う機会を得た。率直に感想を言えば、見れば見るほど、どうしてもなく「クセになる絵」であると感じた。踊るような筆致と、その筆先

で探るように、あるいは削るようにして掘り起こされた複雑な色彩は、目の前に拡がっている世界が如何に虚ろなのかを問い、その先に在るもの、奥底に秘そむものの正体を掴もうとしているかのように見える。絵は完成し筆は既に止まって久しいのに、見る人の心の中で続きが結ばれるような、そんな体を醸している。

喜多村知は、満州大連市(現中華人民共和国遼寧省)に生まれ、京都の京都市立美術工芸大学(現京都市立芸術大学)で日本画を、東京の川端絵画研究所や太平洋画会研究所などで洋画を学んだ後、馬込を拠点に帝展や国画会展に作品を発表した。島根県とも関わりが深く、父の故郷・島根県津和野町を出自の地とし、戦争末期に同地に疎開。1945(昭和20)年から1948(昭和23)年まで、島根県立津和野高等女学校(現島根県立津和野高等学校)で美術教師を務めた。上京後はフランス、スペインに遊学し、よりその地の空気を内包させ、自身を表現する手

段として、風景画の可能性を深化させた。転機が訪れたのは、1975(昭和50)年、現代画廊を営む洲之内徹との出会いであった。洲之内はこれまでも村山槐多など数多くの異色の画家の才能を見だし、美術評論家として戦後の日本の美術の真価を説いた。喜多村知は、松田正平とともに無二の画風を高く評価され、数多くの個展を開いて独自の表現を追求した。89才の生涯を終えるまで自らの絵を描き続けた。

喜多村知が世を去って20年。遺族のほか所蔵家の方々のところで、多くの作品を実見することが叶ったが、「クセになる絵」に魅せられた人々の話は尽きず、今も全国に根強いファンが多いことを実感した。ここに今見るべき絵、もう一度見直すべき風景がある。写真図版ではなかなか伝わらない色彩の妙味を是非会場で味わっていただきたい。

(左近充直美 当館専門学芸員)



《オーヴェルシュワーズ》 1964年頃 個人蔵



《能生》 1988年 島根県立美術館蔵



《舟》 1991年 あざかみ美術館蔵